

# 読み書きの苦手な児童への在籍学級と連携した通級による指導



市川市立中山小学校教諭 谷 順子

## 1 はじめに

本校は令和元年度に通級指導教室（LD／ADHD）を開設した。自校、他校の通常学級に在籍している児童が通級し、個に応じた指導を行っている。一人一人の発達段階や実態に応じた指導を行うためには、保護者や学級担任との連携は不可欠である。連携によって共通理解を図ることができ、指導目標や支援方法等が明確になる。また、保護者の思いや願いを共有し、今後の効果的な支援につなぐことができる。在籍学級と連携した通級による指導の実践事例について紹介する。

表1 指導計画（20時間計画）

活動内容
1. 身体を動かす <ul style="list-style-type: none"> <li>トランポリン、ストラックアウト</li> <li>バランスボール、風船バレー</li> <li>サーキット運動、まねっこ体操</li> <li>ビジョントレーニング</li> </ul>
2. 空間認識・目と手の協応性を高める課題 <ul style="list-style-type: none"> <li>タングラム ・ジオボード</li> <li>プリント（点つなぎ、迷路、まちがい探し）</li> </ul>
3. ひらがなを読もう <ul style="list-style-type: none"> <li>ひらがなの清音、特殊音節を読む。 （清音→濁音→半濁音→拗音）</li> <li>ひらがなの単語を読む</li> <li>単語のモーラ*分解をする。 *「モーラ」とは、言葉の音の単位。</li> </ul>

## 2 読み書きの苦手な児童の授業実践

### (1)実態

在籍学級では明るく活発に過ごしている4年生の児童が、読み書きの習得に困り感があり、「文字が読めるようになりたい。」「文字を書けるようになりたい。」という願いをもっている。ひらがなの読み誤りが多く、文章は逐次読みになる。これらは、音韻認識の弱さ、空間の中で形を弁別する力が弱いことや身体のバランス感覚などの調整力が影響している。

### (2)授業実践

ひらがな50音の読みを習得するためには、空間認識やボディイメージを育てることが読み書きの基礎になると考え、学習の始めに身体のバランス感覚や目と手の協応性を高める課題を継続的に取り入れた（表1参照）。

### (3)成果

ひらがなの文字と音を一致させるために、机上の学習だけでなく、身体の動きを取り入れることで、読みの定着につながった。

## 3 在籍学級との連携

在籍学級の学習場面で、読み書きの負担を軽減するためには、通級指導教室の場だけではなく、児童の思いに寄り添い、保護者、学級担任と以下のような支援を確認した。

- ①文章は、できる限り全体や個で読み聞かせ（代読）をする（テストも含む）。
- ②電子教科書など音声読み上げ機能のある教材を活用する。タブレット端末を補助的に使う。
- ③文字を書く課題は、教科書やドリルに直接書き込む。書く量を調節する。
- ④板書は必要に応じて、写真に撮って印刷したものをノートにはる。

「わかった」「できた」と学びの達成感を味わえるよう、個に応じた適切な支援をしたり、ICTを効果的に活用したりすることが、将来の自立への力になる。そのために、通級による指導担当者が児童の代弁者となり、連携の架け橋となることが重要である。